

「光が見えるだろう？ そこに向かってはって行け」（サーロー節子）。「分断」と「不寛容」のただ中にあった2017年。だからこそ「光」に向かって人間の知性は歩み続けた。各分野で活躍する5氏に今年の「私の3冊」を挙げてもらった。

2017年

私の3冊



イラスト・田中靖夫

時代、社会は激変している。その激変の根源、構造変化をもたらすものは2つある。1つは人口減少・少子高齢化ということ。もう1つはAI（人工知能）やロボット、IoT（モノのインターネット）が予測できないスピードで進展していることだ。

人口減少・少子高齢化社会の日本は、時系列的にどういう姿になっていくのか。その現実を突きつけたのが、『未来

衆議院議員

太田 昭宏

の年表』だ。各統計をひとつにまとめるのは大変苦労したと聞くが、「2026年、認知症患者が700万人規模に（「認知介護」が急増）」「2033年、全国の住宅の3戸に1戸が空き家」「2050年、世界的な食料争奪戦に巻き込まれる」など、刺激的であるとともに、今やるべきことを考えさせる。

『人工知能と経済の未来』は、AI、ロボット、IoT、

BT等々が、どの程度のマブニチユードで世界を激変させるかを示す。2030年頃を境として、それ以前を「特化型AIの時代」、それ以降を「汎用AIの時代」と位置づける。汎用AIは、人間と同様に多くの知的課題をこなすし、経済構造を大きく変える。人工知能に仕事を奪われ、雇用は激変するとともに、「人間とは何か」の根源まで考えざるを得なくなる。

来年は明治150年を迎えるが、日本の中央集権国家建設の黎明期を、美しい盲目の娘を通じて描いた『蘇我の娘の古事記』は、歴史の鼓動を聞かせてくれる。乙巳の変、壬申の乱等、7世紀に王位をめぐる激しい親兄弟の殺戮・抗争が繰り広げられるが、蘇我入鹿の娘の愛と哀しみが心に浸み込んでくる。

河合雅司 著

未来の年表

講談社現代新書

821円

井上智洋 著

人工知能と経済の未来

文春新書

864円

周防柳 著

蘇我の娘の古事記

角川春樹事務所

18036円